

学び舎通信

3月号

町内小中学校の情報を
毎月お届けします



第54回立志式

大中

2月3日に立志式が行われました。昭和39年に、童話作家の濱田廣介氏の提唱を受け全国に先駆けて行ってきた、脈々と受け継がれてきた伝統ある行事です。立志式を迎えるにあたり、2年生全員が将来の目標や夢、生き方などについて自分の考えを書き文集にまとめました。式のなかでは各学級の代表者が所感発表を行いました。一人一人が自分を見つめ直し、将来について考えを有意義な機会となったと思います。また、保護者への感謝の手紙を代表の親子が壇上で披露し、皆さんに感動を与えました。式に参列した1年生は、立派な先輩の姿を見て、決意を新たにしていました。

将来の健康のために：「がん教育・出前授業」
1月18日、宮城県対がん協会保健師のかたをゲストティーチャーとして迎え、「がん教育・出前授業」を実施しました。これは来年から全国で実施される「がん教育」について実施したもので、3年保健の授業のなかで行いました。「がんができる仕組み」と「がんを予防する方法」についてわかりやすい図やグラフを用いた話で、生徒達は目を皿のように見入っていました。がんは恐い病気ということを知っているもの、なぜできるのか具体的な予防法は何かなど、熱心に聞き入り、表情は真剣そのものでした。がん検診発祥が宮城県ということを知り、感想には「検診を受けて予防する」が多く書かれていました。



金中



心の鬼を退治しよう
「節分集会」

本校では、伝統的な行事や風習等を尊重する態度を育成するために、伝統文化教育を推進しています。その一環として、2月3日に節分集会を行いました。集会では、児童会の子どもたちが節分に関するクイズを出したり、代表の子供が「鬼ヶ鬼」「おしゃべり鬼」等自分の追い出したい鬼と理由を発表したりしました。また、集会後に、自分の追い出したい鬼をなぐすため、ごのように生活していけば良いかを考えました。節分は、季節の変わり目を指します。「この変わり目が児童の」自分の心を見つめ直す」良い機会になりました。



金小

スキー教室
金ヶ瀬小学校の特色ある教育活動の一つでもある4年生のスキー教室を、今年も1月27日と2月3日の2日間、七ヶ宿スキー場で行いました。スキー教室は、町の生涯学習課の方々や保護者、地域の方々にボランティアとして指導していただきました。ほとんど経験がない子どもたちです。1日目は、雪の上の歩き方、ブーツとスキー板の脱着、止まり方、曲がり方など基本のことを学びました。2日目は、リフトに乗り、全員が自力で滑りました。第一リフトを乗り継いで次のリフトに乗って何回も滑るなど大変な体験をしました。スキーは冬季の体力作りに最も適しているスポーツで、すぐに上達するものです。家族で一緒に滑るのもいいですね。



南小

夢や目標に向かって羽ばたいて!

2月14日に「楽大未来塾」を開催しました。当日は、前案天イグルス永井怜投手（現ジュニアコーチがドリムアンバサダー（夢の伝道師）として来校しました。小学生時代に野球と出会い、プロ野球選手になる夢を叶えていった体験を4年生に熱く語りかけました。プログラムにはホームラン競争もありました。その際に、自分の将来就きたい職業を宣言したり、どんな姿を思い描いているか発表したりしました。先日「2分の1成人式」を終えたばかりの児童にとって、夢や目標に向かって努力することの素晴らしさについてもう一度見つめ直す有意義な時間となりました。

暗唱大好きシリーズ⑪ 大小編

全作品の暗唱を目指して
暗唱活動

「合格しました。一生懸命に練習して良かったです。」「最後の一文を忘れませんでした。もう1回挑戦します。学級での暗唱テストの一幕です。暗唱テストでは、「おおがわら暗唱読本「寿限無」」の作品を発表します。それに向けて、児童は、休み時間や放課後も熱心に練習しています。特に、外で遊べない日は、休み時間に友達と声を掛け合い暗唱活動に取り組

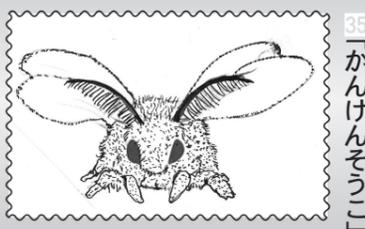


んでいます。学級担任や暗唱テストに合格した「暗唱リーダー」は、練習してきた人の暗唱を聞き、合格したらシールを貼る等活動への意欲を向上させています。児童の目標は、「寿限無」の全作品の暗唱です。暗唱活動をおして、発表への自信をつけたり知的財産を増やしたりしていきます。



身近な自然再発見

…人間と共生する昆虫たち…



▲カイコガ

テレビで皇后さまが皇居内で蚕(かいこ)を育てるニュースが流れていました。その蚕は皇室が何代にもわたって育ててきた日本古来の「小石丸」という品種だそうです。蚕は昔から人間にはとても利用価値が高い虫でした。蛹が入っている白い繭からとれる絹糸で絹織物を仕立てれば、高価で取り引きされたからです。蚕はもともとカイコガというガの幼虫です。この幼虫は新鮮なクワの葉しか食べません。たくさん飼っているときは、毎日その日の朝に摘んだ葉っぱを与え続けなければなりません。きつと養蚕農家には重労働だったことでしょう。

大きくなった幼虫が一斉に食べ

べだすと、まるで部屋中に雨音のように響いたそうです。今でも町内の小山田や堤の道端にはクワの古木や養蚕に使われた2階建ての建物が残っています。糸を取った後の蛹も甘辛く煮れば「イナ」と同じように食用になつて絹糸だけでなく食材としても役に立ってくれたわけです。まさに人間にとっては優等生のような虫です。

養蚕と言うと、私が思い出すのは子どもの時に耳にした「かんけんそう」という言葉です。子どもの耳には「かんけん」が意味不明でした。漢字で書けば「乾繭倉庫」。町内や周辺から集めた繭を乾燥させて保管するための倉庫でした。今の駅の南側にあるJA農協敷地内に高い2本のサイロのようなタワーと石造りの大きな倉庫が並んで建つ風景が思い出されます。養蚕を取り巻く状況が変わってしまいましたが、今は取り壊されてしまいました。これも人間と蚕をめぐる時代の流れのひとつかもしれません。次回は、「青いイナスマ」と呼ばれた蝶の話です。

元金小校長、昆虫教室(町教育委員会主催)講師 鈴木健司さん